



スタッフとのおしゃべりも日々の楽しみの1つ



理学療法士の元気な呼びかけで、食後のストレッチと脳トレ体操がスタート



月に1回、老健施設の理学療法士が生活機能訓練を実施



少し難易度の高い脳トレ体操も皆と一緒に楽しむ



スタッフと共に真剣に脳トレ体操に取り組む



親子のように折り紙を楽しむ利用者とスタッフ

長年培った 「自立支援」の 集大成として 開設

岡山県の西南部に位置し、瀬戸内海の温暖な気候と豊かな自然に育まれた風光明媚なまちとして知られる人口約3万2000人の浅口市。

この土地で200年以上の歴史を有す医療法人福嶋医院(福嶋啓祐理事長は、江戸時代から現代に至る長い年月のなかで代々受け継がれた「かかりつけ医」のスピリッツを大切にしながら、地域医療・福祉に貢献し続けている。

同法人は、地域全体を「病院」に見立て、診療所を「医局」、在宅患者宅を「病室」、道路を「廊下」という発想で在宅医療にも携わってきた。その後、地域の高齢化の進展を鑑み、1998年にデイケアを併設した介護老人保健施設「いるかの家」ハビリテーションセンター(以下、老健施設)を開設。イルカが海のなかで群れの仲間たちといたわり合って共生していることから、「イルカのように優しくなりたい」との思いを施設名に託したという。

同法人は老健施設開設を機に、医療・介護のチームアプローチに磨きをかけ、高齢化や人口の減少と共に低下する在宅家族の介護力を強力にカバーすることをめざした。こうした取り組みは、法人の基本理念である「皆に優しく、共に楽しく」に基づいており、入所および通所サービスを通じて「いつまでも

住み慣れた地域で「自分らしく暮らしたい」と願う高齢者を支え、寄り添うケアへとつなげていった。

同法人は介護事業に参入して以来、リハビリテーションと認知症ケアに重きを置いた「自立支援介護」を実践してきた。そのノウハウをフルに活かすべく、2022年3月にオープンしたのがグループホーム「いるかの郷」だ。

老健施設に併設されていたショートステイのスペースをリノベーションした同事業所は、2ユニット(定員18人)で構成。老健のエントランスを抜けてグループホームのゾーンを訪れてみると、北欧調の家具やファブリックが配されたスタイリッシュな設えが目を引く。

全18室の居室は、4パターンの異なる色の壁紙が施され、片面を花柄にしたメリハリのある内装だ。これはデザイン性を重視するとともに、利用者が自室を認識しやすくなることにも配慮されている。

出迎えてくれた管理者の三宅勝代さんは、「明るく清潔感のある空間は、ご利用者様の状態が落ち着くことはもちろんですが、スタッフのモチベーションも上がります」と笑顔で話す。

各ユニットに設けられたリビングルームには、スタッフが見守るなかで、自分らしく「思い思いに過ごす利用者たちの姿がある。

塗り絵に没頭する人、折り紙に興じる人、スタッフとのおしゃべりを楽しむ人、主婦時代の経験を十二分に活かしてスタッフの仕事を手伝う人……。過ごし方はそれぞれだが、その表情は皆穏やかで時折見せる笑顔が印象的だ。